

# 丹波



宮前 みやまへ

裕太 ゆうた さん

(37) 亀岡市保津町

のどかな田園風景が広がる亀岡市旭町に昨年構えた3棟のビニールハウスで、イチゴ栽培に精を出す。亀岡での収穫日が多い。「食べてくれ



真っ赤に熟したイチゴを手に笑顔を見せる宮前さん(亀岡市旭町)

たお客さんの笑顔が元気の源。まだ手探りの日々ですが」と謙虚に笑う。

始業は午前5時。まだ辺りが真っ暗な中、寒さで実がぎゅっと締まったイチゴの収穫を進める。交配用のミツバチが飛び交うハウスに植わるのは、ほんのりとした朱色の「あきひめ」と、真っ赤な「紅ほっぺ」。2種

田んぼを改良し、イチゴ専業農家としてのスタートを切った。

ただ、市内に施設園芸は少なく、イチゴを栽培する農家も片手で数えられるほどしかない。「人間と同じで、すぐに答えが出ない生き物」というイチゴの苗と向き合いながら、室温管理や水やりの方法を模索する毎日だ

く利用できれば、と工夫を重ねる。

丹精込めて作った朝採れイチゴを、ハウスの横にテントを張って対面販売することもある。「市販の商品の多くは、消費者の手に渡るまでに3日ほど必要なため早めに収穫する。完熟イチゴを食べられるのは作っている地域だけ」と、鮮度に強

## 鮮度に強いこだわりの

類約1万株のイチゴの収穫やパック詰めから出荷まで、全て1人で作業している。

った。

京都市出身。アパレル業界などを経て、30代前半で就農、独立を支援する守山市の農業法人で経験を積んだ。「地元京都産のイチゴを作りたい」と府内で畑を探し、昨春妻と2歳の長女を連れて亀岡市に移住。市北部の

そしていよいよ収穫期を迎えた11月下旬。この時季から、亀岡盆地には濃霧が発生する。日照不足ではきれいに色づかないため、霧が晴れる昼ごろまで電照で補う必要がある。一方で「厳しい寒さは甘みを引き出す効果もある」と話し、亀岡特有の気候をおいしいイチゴを育む条件としてうま

こだわりの見える。若手農家として、自慢のイチゴを中心としたまちづくりに意欲的だ。「地域で頑張る農家を集めてマルシェを開き、たくさんお客さんを呼べるような仕掛けをつくりたい」(上田真里奈)

# 丹の人